

令和 2 年 6 月 30 日現在

機関番号：23102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04695

研究課題名(和文) 子ども観の昭和史：教育・福祉・家族の網の目と多様な子ども観の歴史社会学

研究課題名(英文) A Historical Sociology of Childhoods in Japan: Focusing on Networks of Education, Family and Child Welfare in the Showa Period

研究代表者

高橋 靖幸 (Takahashi, Yasuyuki)

新潟県立大学・人間生活学部・講師

研究者番号：30713797

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、昭和戦前期、戦中期、戦後期の子ども問題の事例の分析と考察に取り組むことで、近代的な子ども観の「誕生」という、従来の子ども研究の強固な枠組みから距離をとった新たな視点から、子どもの「近代」を描くあり方を具体的に提示した。子どもの近代の変遷を近代的子ども観の「誕生」の歴史として一枚岩的に捉えることなく、同時代に生成される子どもの多様な現実を複層的・多層的な視点から描く子ども研究の可能性を例証した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、欧米において2000年代より今日まで検討の続けられている子ども社会学研究の新たな潮流を受容しつつ、日本の具体的な事例の分析を通じて、子ども社会学の視角を体系化することに成功した点にある。こうした本研究の成果には、日本における現在進行形の子ども問題を考察するための新たな基盤を提供することに貢献する社会的意義を認めることができる。

研究成果の概要(英文)：This study analyzes and examines cases of children's problems in the pre-war, mid-war, and post-war periods of the Showa era to describe the "modernity" of childhood from a new perspective that differs from the traditional framework of child studies. This study exemplifies the possibilities of child studies that does not take a monolithic view of the modernity of childhood as the history of the "discovery of childhood" but describe diverse realities of childhoods from the multitiered point of view.

研究分野：教育社会学

キーワード：社会学 子ども観 子ども史 子どもの誕生 児童虐待 戦時動員・疎開 児童養護 構築主義

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

1980年代より、日本においては、フィリップ・アリエスの『子供 誕生』(Ariès 1960=1980)の翻訳出版をひとつの契機に、教育、福祉、家族といった幅広い領域で、「子ども」にまつわる諸概念・諸制度の歴史性・構築性を明らかにする研究が生み出されてきた。しかしながら、それらの研究の多くが、「誕生」という視角を過度に受容するあまり、近代的な子ども観の「誕生」を探究するという命題を強く前景化させ、歴史の経過における同時代の子ども観の多様性を一枚岩的に捉える志向を強くするといった問題を抱えてしまっていた。早い段階で、宮澤康人(1988)が前近代/近代の二分法に読まれがちなアリエスの記述の問題を指摘し、広田照幸(1998)が子ども観の構築を重層性や段階性をもった複雑なプロセスと見る必要性を強調したにもかかわらず、このような視角からの子ども観の探究は長いこと手薄であった。一方で諸外国に目を向けてみると、社会学における子ども研究には、2000年代より新しい潮流が生まれ、「子ども」を複層的な観点から捉える重要性が積極的に提出されるようになってきている。代表的な研究としては、社会のネットワークを構成するアクターのひとつに子どもを位置づけ、他のアクターとの結びつきの中で子どもを捉える「アクターネットワーク理論」に準拠する Alan Prout (2004=2017) の子ども研究があげられる。今日、こうした諸外国の子ども研究の潮流の応用可能性を検討しつつ、日本の「子ども」の近代を複数性・多様性の層のもとに見直すことが求められている。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、「子ども観の昭和史」という枠組みを設定し、昭和期における子ども問題を事例に、日本の近代的な子ども観の構築の過程を複数性・多様性のもとに描き直すことにある。通常、昭和期とは、日本において、近代的な子ども観の「誕生」により、「保護と教育の対象としての子ども」という子ども観が社会の各領域に広く「浸透」し、しかし同時に昭和期の終わりには、子どもの自明性が問われるような、子どもを取り巻く数々の事件が社会問題化したことで、近代的な子ども観が大きく「揺らいだ」時期でもあったと評される。しかしながら、こうした視角から子どもの歴史を眺めたとき、保護と教育の眼差しや制度から零れ落ちる子どもたちの姿は背景に退き、近代的な子ども観の「誕生」に関する定型化された歴史が強化され、またそれが固定化される可能性をもつ。昭和期における子ども観の構築の歴史を「誕生」「浸透」「揺らぎ」という一枚岩的な展開として探究する視角は、保護と教育を十分に享受しなかった(享受できなかった)同時代の子どもたちに対する社会の眼差しや語りを、十分に汲み取ることができない。こうした関心から、本研究は、昭和期における、典型的な子ども期の制度的な広がり、そこから零れ落ちている多様な子どもたちの現実、さらにはそれらを問題として言語化したりしなかったりする言説の関係性を具体的に解きほぐしていくことを目的とする。本研究は、このような視角から日本の「子ども」の近代を描き直し、子ども研究を理論的に精緻化すると同時に、現在進行形の子ども問題を考察する基盤を社会に提供することを目指す。

### 3. 研究の方法

以上のような学術的背景と目的に基づき、本研究は歴史社会学の視座から、教育・福祉・家族・医療等の複数領域が交錯して構築される、子どもの多様な言説を読み解く。資料として、子どもの保護と教育を実現する法制化の過程を記録した議事録や報告書、専門書や学術誌、新聞や大衆雑誌等を収集し、それらについて言説分析を行う。

本研究では、各論として、昭和戦前期以降の児童虐待問題の子ども、戦中期の戦時動員・疎開の子ども、戦後期の児童養護問題の子どもを対象に分析と考察を行う。総論として、上記各論の研究の成果を総合するかたちで、子ども観の昭和史の特徴について仮説的見取り図を得る。その上で、これら総合的な研究成果の獲得を通じて、子ども研究の理論的・方法論的課題についても、国内外の子ども研究の動向を踏まえながら検討を重ねていく。

### 4. 研究成果

本研究は、昭和期の変遷における子ども問題の具体的な事例の分析と考察の成果として、近代的な子ども観の「誕生」という枠組みとは異なった、子どもの「近代」を捉えるための新たな視角の可能性を体系的に提示することができた。

#### (1) 昭和戦前期における児童虐待問題の子ども

1933年、児童の虐待を取り締まることを目的とした「児童虐待防止法」が制定される。先行研究では、多くの貰い子殺しの事件が「児童虐待防止法」を求める世論を形成し、法律制定を後押ししたと言われる。本研究は、そうした社会問題化の過程を、単純に「日本社会が子どもを保護する制度を整え、近代的な子ども観を獲得する過程」といった、子どもの「誕生」の歴史の一面としてのみ捉えるのではなく、子どもを保護する新しい法律の制定によって生じる社会の様々な葛藤や、より複雑な変動に目を向け、その内実を明らかにした。

分析の結果、1930年以降の一連の貰い子殺し事件が虐待問題として議論され法律制定の流れを形成したものの、その後虐待問題の中心が児童労働へ移行して行き、貰い子殺しを児童虐待防止法の制定と関連付けて論じる議論が影を潜めていったことが明らかとなる。そればかりか、児童虐待防止法の制定後も貰い子の慣習は継続され、貰い子殺しは社会を賑わせ続ける。子どもの「誕生」という関心から見て、これは単純に、児童虐待防止法の制定によって子どもを保護する

「理念」は成立したものの、子どもを取り巻く「実態」がその理念に追いついていなかったと結論づけることのできるものではない。社会は法律の制定によって、貰い子を虐待の問題として語る認識の枠組みを獲得するが、同時に貰い子を虐待の問題として捉えきれない部分を新たに発見し、その部分を別の問題として語り直していかなければならない、子どもの新しい「現実」を構築したことが明らかとなった。

#### (2) 戦中期の戦時動員・疎開の子ども

近代的孩子観の「強化」とも「揺らぎ」とも見える総力戦期の学徒勤労働員と学童集団疎開を事例に、「子ども」の近代を捉える枠組みについて考察を行う。「本土決戦」が差し迫った太平洋戦争末期、家族と学校を中心とする「保護複合体」にかなりの程度包摂されたはずの「子ども」について、社会的な再配置が行われる。一見、役に立つのか足手まといかという身体の生物学的リアルに基づいた選別かに見える事態だが、実際には既存の知や制度を流用する形で行われたことに着目した。

分析の結果、総動員体制において、ティーンエイジャーは十分な労働力であったが、その勤労働員に際しては、既存の命令系統を流用するために学校単位の動員かが決められた。その結果、「勤労教育」や「錬成の一環」といった教育的レトリックが最後まで手放されなかった。また、動員対象拡大の際には、「発達に留意」しながら、学年に沿って行われた。一方、学童集団疎開では、実は、勤奨による縁故疎開が進まない中、既存の指揮系統を利用して足手まといを大量移動させる手段として提案されたのだが、家族説得の際は、「次代の戦力の保持」「集団精神の涵養」という形で教育的レトリックが流用された。結果として、集団生活に適さない、最も足手まといである未就学児や低学年児童は、むしろ空襲下に留め置かれることとなった。「子ども」の構築とは、このように既存のネットワークを前提に特定の状況下で行われるものである。そのつらなりは、人の生き死にすら規定する。物理的な身体上の差異も、その解釈と実践のネットワークの中で意味を付与されながら、他の要素と結び付けられていく。とりわけ、近代が用意した学校その他の年少者用の制度と知の強さとの綱引き、そしてその効果に注目することが重要であることが明らかとなった。

#### (3) 戦後期の児童養護問題の子ども

1960年代になされた里親委託実践を事例に、子ども論の中で論じられてきた子ども観の「誕生期」(1930年代)から「普及期」「安定期」(1960年代)を経て「揺らぎの時代」(1980年代)へ至るといって従来図式の問い直しを行う。その際、同時期に人口に膾炙していく近代家族という規範や「子どものニード」概念が里親委託実践の中でどのように用いられ、この時期の里親実践といかなるかたちで相互に影響しあいながら、里親委託実践が再編されていったのかを検証する。具体的には、「戦後初期の混乱期」を脱し、新たな社会的養護のあり方が模索されていた1960年代初頭の社会的養護について、特に1961年に発足した家庭養護推進協会の設立プロセスとその後の初期の活動の展開に焦点を当てた。

分析の結果、里親委託は、子どもの事手伝いや家業などの労働力目的で里親側のニーズに沿う形でなされることが多く見られた従来の状況に抗する形で、家庭養護推進協会の運が特に「子どものニード」を前面に押し出ししながら、里親委託のあり方の再編を企図して開始された活動であったことが明らかとなった。同協会の活動実践の中では、「子どものニード」という概念を中心に里親委託のあり方全体が再編されるべきであること、そして実親家庭から引き離されながら養育される子どもにみられる児童精神医学上の「発達の遅れ」を回避することを中心に里親委託実践の再編がなされたことが明らかになった。近代家族という概念・規範は、1960年代初頭という里親委託のあり方の再編期というタイミングで、特に「子どものニード」を中心概念に据える形で里親実践活動家に参照され、この時期の里親委託再編の指針としての役割を与えられることになったことが明らかとなった。

#### (4) 近代的孩子観の「誕生」を問う新たな視角

本研究の上記各論による取り組みの結果、子どもの近代を問う視角として、子ども観を近代になって一枚岩的に誕生したものとして捉えないことを前提としつつ、子どもをめぐる教育、福祉、家族などの諸事象の連関をどう記述するか、そしてそれら複数の諸事象が織りなす近代の特徴をどう描き出すかの2点から、子ども観の「誕生」と見える事態を描き直していく具体的な方向性を明らかにすることができた。その新たな視角の方向性として、子どもをめぐる諸事象の連関をハッキング(Hacking 2002=2012)の論じる歴史的存在論の水準に焦点化して記述すること、そしてドンズロ(Donzelot 1977=1991)の「保護複合体」と「逃走線」というメタファーに戦略的に依拠し、「近代的孩子観」なるものを過度に全域的なものとして想定せず、そこから零れ落ちる子ども観や子どもたちの現実を含みながら展開する歴史を描き出していくことを提示した。こうした視角から歴史を捉えることにより、ある子ども観が中流層に登場したり、特定の子ども期の実現を目的とした法制度上の整備が進んだりしたことで、下層階級の「実態」なるものも発見されて「複合体」に取り込まれたり、逆にそれらが複合体から不可視化されてやり過ごされたりする、複数的で多層的な子どもの近代の様相を明らかにすることができるはずである。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 元森絵里子	4. 巻 43
2. 論文標題 角兵衛獅子の復活・資源化から見る子ども観の近現代	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ソシオロゴス	6. 最初と最後の頁 157-185
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉田耕平・土屋敦	4. 巻 9巻1号
2. 論文標題 体罰から向精神薬へ：Z県の児童養護施設Yで働く施設職員の語りから	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 地域科学研究	6. 最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉田耕平・佐藤文哉・土屋敦・上野加代子	4. 巻 9巻1号
2. 論文標題 子どもの問題行動への視角の変遷と医療化プロセスの検証：1960年代から2010年代の医学文献の検討から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 地域科学研究	6. 最初と最後の頁 23-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Eriko Motomori	4. 巻 154
2. 論文標題 The Birth of Childhood as a "Complex" and "Lines of Flight": An Analysis of the Enactment Process of the Factory Act in Japan	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 明治学院大学社会学・社会福祉学研究 = The Meiji Gakuin sociology and social welfare review	6. 最初と最後の頁 83-112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 元森絵里子・坂口緑	4. 巻 50
2. 論文標題 川崎市における在日外国人施策と地域実践 多文化共生の先進地域の成り立ちと現在	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 明治学院大学社会学部附属研究所研究所年報	6. 最初と最後の頁 167-183
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 元森絵里子	4. 巻 152
2. 論文標題 角兵衛獅子はいかにして「消滅」したか：「近代的孩子観の誕生」の描き直しの一例として	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 明治学院大学社会学・社会福祉学研究	6. 最初と最後の頁 1-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 元森絵里子	4. 巻 3
2. 論文標題 近代以降、「子ども」はどう捉えられてきたか	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ASSEMBLY	6. 最初と最後の頁 15-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋靖幸	4. 巻 102
2. 論文標題 昭和戦前期の児童虐待問題と「子ども期の享受」：昭和8年児童虐待防止法の制定に関する構築主義的研究	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 教育社会学研究	6. 最初と最後の頁 175-194
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 土屋敦	4. 巻 23
2. 論文標題 『保護されるべき子ども』と親権制限問題の一系譜 児童養護運動としての『子どもの人権を守るために集会』(1968 - 77年)	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 子ども社会研究	6. 最初と最後の頁 113-131
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 土屋敦	4. 巻 100
2. 論文標題 戦後の社会的養護と子どもの人権の系譜 敗戦後から現在までの歴史を振り返る	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 月刊福祉	6. 最初と最後の頁 28-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Eriko Motomori	4. 巻 149
2. 論文標題 Beyond the Dichotomy between Adult's Control and Children's Agency: The Birth of the Pendulum in Prewar Japanese Writing Education	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 The Meiji Gakuin Sociology and Social Welfare Review	6. 最初と最後の頁 195-220
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Eriko Motomori	4. 巻 150
2. 論文標題 Sexual Bodies without Free Will: Lack of Discourse on Children in Arguments about Teenage Prostitution in Prewar Japan	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 The Meiji Gakuin Sociology and Social Welfare Review	6. 最初と最後の頁 77-105
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Yasuyuki Takahashi
2. 発表標題 Challenging Child Issues in Japan
3. 学会等名 The 2nd International Seminar on Family and Consumer Issues in Asia Pacific (Institute Pertain Bogor, Indonesia) (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yasuyuki Takahashi
2. 発表標題 Current Status and Issues of Early Childhood Education and Care Systems in Japan
3. 学会等名 International Symposium: Current Problems and Strategies for Supporting the Healthy Development of All Children (University of Niigata Prefecture, Japan) (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Eriko Motomori
2. 発表標題 How to Look at Childhood and Modernity: Beyond the View of the New Wave
3. 学会等名 14th Conference of the European Sociological Association (European Sociological Association, United Kingdom) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 元森絵里子・高橋靖幸・土屋敦
2. 発表標題 「子どもの誕生」再考(4) : 子どもの構築論の更新に向けて
3. 学会等名 第92回日本社会学会大会(日本社会学会、東京女子大学)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 土屋敦
2. 発表標題 『愛着障害』概念の変遷と社会的養護
3. 学会等名 福祉社会学会第16回大会公開シンポジウム「『多様な親子関係』への支援を再考する」(福祉社会学会、明治学院大学)(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 土屋敦
2. 発表標題 記録の残存/保存から戦後の孤児史・施設史を構想するために
3. 学会等名 日本教育学会第78回大会ラウンドテーブル「子ども史研究再考:記録保存、分析視座、歴史叙述」(日本教育学会、学習院大学)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高橋靖幸
2. 発表標題 「子どもの誕生」再考(1):昭和初期における「貰い子」と「児童虐待」の交錯
3. 学会等名 日本社会学会第91回大会(甲南大学)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 元森絵里子
2. 発表標題 「子どもの誕生」再考(2):戦時動員・疎開における近代的孩子観と身体のリアルの交錯
3. 学会等名 日本社会学会第91回大会(甲南大学)
4. 発表年 2018年



1. 発表者名 土屋敦
2. 発表標題 「子どもの誕生」再考(3) : 1960年代里親委託実践にみる「子どものニード」と養護実践の相互昂進
3. 学会等名 日本社会学会第91回大会(甲南大学)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高橋靖幸
2. 発表標題 1930年代の児童虐待問題に浮上する「子ども」の複数性 焦点の定まらない虐待被害者としての児童
3. 学会等名 日本子ども社会学会第24回大会(東京学芸大学)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 高橋靖幸
2. 発表標題 「子どものため」にどう挑むか 子ども社会研究の射程を広げる(担当:「子ども」を研究することの政治と倫理の問題)
3. 学会等名 日本子ども社会学会第24回大会(東京学芸大学)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 土屋敦
2. 発表標題 施設の子どもの戦後史
3. 学会等名 比較家族史学会第61回春季研究大会(早稲田大学)
4. 発表年 2017年

## 〔図書〕 計5件

1. 著者名 元森絵里子・南出和余・高橋靖幸編（執筆者：元森絵里子・吉岡一志・南出和余・高橋靖幸・大嶋尚史・坪井瞳・藤間公太・針塚瑞樹・土屋敦・野辺陽子）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 208
3. 書名 子どもへの視角：新しい子ども社会研究（担当：元森絵里子「はじめに」「序章 子どもをどう見るか：20世紀の視点を乗り越える」高橋靖幸「第3章 子ども研究における『構築』とは何か：児童虐待の歴史」土屋敦「第8章 『戦争孤児』のライフストーリー：カテゴリーとスティグマのループ」）	
1. 著者名 大桃伸一編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 学術図書出版社	5. 総ページ数 254（183-201）
3. 書名 未来を拓く保育の創造（担当：高橋靖幸「第11章 保育の制度」）	
1. 著者名 北澤毅・間山広朗編（執筆者：北澤毅・小野奈生子・鶴田真紀・高橋靖幸・酒井朗・大辻秀樹・山田鋭生・間山広朗・佐山彰浩・岡和香子・稲葉浩一・油布佐和子）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 北樹出版	5. 総ページ数 184（42-56）
3. 書名 教師のメソドロジー：社会的に教育実践を創るために（担当：第3章 becomingとしての子ども / beingとしての子ども）	
1. 著者名 比較家族史学会監修・小山静子・小玉亮子編（執筆者：小山静子・柴田賢一・野々村淑子・山本敏子・広井多鶴子・海妻径子・小玉亮子・河合務・服部美奈・李璟媛・土屋敦）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 日本経済評論社	5. 総ページ数 310（251-271）
3. 書名 家族研究の最前線 子どもと教育：近代家族というアリーナ（担当：第10章 里親委託の再編と「子どものニード」の前景化：一九六〇年代初頭の家庭養護促進協会発足と「愛の手運動」の軌跡から）	

1. 著者名 土屋敦・野々村淑子編（執筆者：土屋敦・野々村淑子・乙須翼・草野舞・足達咲希・大森万理子・田中友佳子）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 376 ( 309-352 )
3. 書名 孤児と救済のエポック：十六～二〇世紀にみる子ども・家族規範の多層性（担当：第7章 孤児の公的救済におけるフロイト主義の関与：戦時期から1960年代における欧米学説の日本への移入過程を中心に）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	土屋 敦  (Tsuchiya Atsushi)  (80507822)	徳島大学・大学院社会産業理工学研究部（社会総合科学域）・准教授    (16101)	
研究分担者	元森 絵里子  (Motomori Eriko)  (60549137)	明治学院大学・社会学部・教授    (32683)	